

# 学園だより

地方競馬益金事業  
No.14  
1982年5月20日発行  
財団法人  
中国四国酪農大学校  
電話 086766-3651



酪農大 学校前

## ごあいさつ

校長 三村 剛

卒業生の皆さん、お元気で、活躍のことと思います。

私は、このたび岡山県畜産課より皆様の母校に赴任してまいりました。よろしくお願い致します。

蒜山はまだ肌寒く地温も上がらず、牧草の伸びが少なく、放牧には今一つの様に見受けられます。

今までは、畜産行政のサイドから本校運営を援助してまいりましたが、実際に後継者育成に直面しまして、非常に責任を感じているところであります。しかし、卒業生五八四名の同志を得ましたことを、力強く、又、大変喜んでおります。

皆さんもご承知のとおり順調に発展してまいりました酪農が、昭和五〇年代に入り生乳需給の不均衡に起因する生乳取引条件の低下等を来し、さらに最近に至り、貿易の不均衡を理由に牛肉の自由化が押し寄せており、酪農全体は深刻な打撃を受け、苦しい状況下におかれまして。これも皆様方が生乳の需給を考慮した均



衡路線による計画生産対策に真剣に取り組まれた結果、今年に入ってから漸次計画生産も軌道に乗って、生乳、乳製品の需給動向が好転の兆しを見せ、需給不安定の長期化より脱しつつあります。これも酪農家皆さんの涙ぐましい努力の賜ものと考えます。

これからの酪農は、多面的創意工夫と連体と協調が大切になってまいりました。酪農経営を改善する上で最も効果を上げるには、一頭当りの産乳量を高めることが重要であります。そのためには、良い乳牛、良い

## 目次

ごあいさつ	1
つれづれ	2
酪農危機を乗り切るために 共に頑張ろう	2
牧場の現況	3
第一牧場	3
第二牧場	5
卒業生からの便り	6
大学校日誌から	8
人の動き	8
十六期生卒業生名簿	9
十八期生入学生名簿	9

エサ、良い管理の基本を今一度見直し、今までの経済優先思考型管理から個体管理飼養に切り換えて、個性ある足、腰の強い経営に取組みたいものです。そこで、学校も乳肉一貫複合経営を試行し、肥育牛一〇〇頭飼養を実施していますが、昨今の肉価の低限で経営の安定は期待に沿えず苦慮しております。

どうか皆さん、不況の長いトンネルも明かりは見えています。頑張ってください。今年度の新入生は、社会情勢の反映からか十七名と少なく寂しい気がします。卒業生の皆様も母校発展の

ため、一人でも多く後継者をご紹介  
 くださるようご協力をお願い致しま  
 す。 最後、卒業生皆様の、尚一層の  
 ご活躍とご健勝をお祈りしまして、

又、皆様も気軽にご来校を載き、  
 その様子なり、ご意見をお聞かせ載  
 ぐあいさつとします。

## つれづれ

次長 日 笠 重 雄

つれづれなるままに筆をとりまし  
 と身の引きしまる気持です。 現在の学校の一日をご紹介しまし  
 た。 よう。

ポプラが高く大きくそびえる校内、  
 そしてだんだん街らしさを増す蒜山  
 に一年の重みを感じるこの頃です。 朝7時50分から始業します。それ  
 卒業生の皆さんの中には、アッま  
 たノと思われる方が多々あると存じ  
 ます。私の最初の赴任は3期生から  
 7期生でした。2回目は10期生、13  
 期生、そしてこの度、16期生（56年  
 4月）からとびとびではあります  
 が、それぞれの期生の思い出が多く  
 残っております。その時その時の出  
 来事が走馬燈のようにかげめぐり、  
 学校の一木一草にいたるまで皆さん  
 の青春の力と汗の結晶を感じていま  
 す。 これも時代の波で現代流に合理的で  
 入学式を終え、昔を懐古しながら  
 もこれからの教育を考える時、一段  
 ることも私の氣を楽にしてくれます。

皆さんもご承知の現下の酪農は混  
 迷の最中にあります。無駄を排し、  
 『手ぬき工事なし』。個体管理の基  
 本にのっとり時代にマッチした経営  
 で厳しさを乗りきっていただきたい  
 ものです。

酪農雑誌、新聞等で卒業生皆さん  
 の活躍を見たり聞いたりする度に懐  
 しく御意見やら思い出話に花を咲か  
 すことができたなら非常に嬉しいのだ  
 がと思っています。

どうぞ気軽にお立ち寄り下さい。  
 髪がすっかり白くなった私がつって  
 います。

これから粗飼料生産に忙しくなり  
 ます。皆様もお体に氣をつけてご活  
 躍下さい。



## 酪農危機を乗り切る

### ために共に頑張ろう

教育部長 雛 川 信 昭

卒業生の皆さんには御健健でそれ  
 ぞれご活躍のこととお喜び申しあげ  
 ます。 光陰矢の如くと申しますが、この  
 学園だよりも今年で第一四号を発行  
 することになり、更に卒業生も開校  
 以来五八五名を数えるに至りました。  
 御承知のとおり、我が国の畜産は、  
 生乳、豚肉及び鶏卵の生産過剰に伴  
 い、計画的な生産を余儀なくされて  
 おり、更には肉類を中心とした一三  
 六品目に及ぶ関税の二年分前による  
 輸入畜産物による外圧等、我々を取  
 りまく環境は極めて厳しいものがあ  
 ります。

一方、昭和五五年農林水産省が発  
 表した「農産物の需給と生産の長期  
 見通し」によりますと、食生活の高  
 度化により今後、乳、肉、卵等畜産  
 物の消費は着実に増加することが予  
 想されており、肉類とりわけ、牛肉  
 については、一人当たり年間消費量が  
 昭和五三年の三・三kgから昭和六五  
 年には約五kgに増加するものと予想  
 されております。 また、乳用牛の飼養頭数について  
 も、昭和五三年の一九八万頭から、  
 二五二万頭へと約二割強の増頭を見  
 込んでいるのであります。 このようなことから我々畜産にか  
 かわる者に寄せられる期待と認識は、  
 今後益々増大するものと思われま  
 す。我々畜産関係者は、乳肉一貫経営を  
 始めとし、創意と工夫をこらして、  
 現在の苦境をのりこえ共によき春を  
 迎えようではありませんか。

さて昨年八月には蒜山において、  
 日本ジャーシー登録協会、全日ジャ  
 ーシー酪農振興協議会の共催のもと  
 に「ジャーシーの改良と飼養管理」  
 の研修会が開催され、二日目は当  
 大学校において未經産、経産牛を使

飼 養 頭 数

牧 場 別	乳 牛 の 種 類		頭 数
	乳 用	肥 育 牛	
第 1 牧 場	ホルスタイン		61
	ホルスタイン		54
	ジャージー		12
第 2 牧 場	ジャージー		150
	ジャージー ホルスタイン		
計	ホルスタイン		61
	ジャージー		150
	肥 育 牛		101

って実地研修を行い、引きつづき家畜改良事業団、図師重考先生より「牛群検定とジャージーのあり方について」の講演が行われました。参加者の中には、当大学卒業生の方にも多数聴講されており大変心強く感じた次第であります。今後においては、ジャージーに限らず酪農経営の根幹をなすものは、乳牛個体の改良を積極的に推進し牛群全体のレベルアップを図るとともに自給飼料の増産を促進することが現在の酪農の危機をのり切るため、不可欠の条件であると思えます。逆境に負けることなく頑張ってくださいよう切望する次第であります。

次に当大学の最近の状況を若干述べさせていただきます。昭和五十七年四月一日現在の飼養頭数は左表のとおりであります。

肥育牛は第一牧場において一二月まで飼育し、第二牧場で仕上げを行うこととし、乳肉複合経営の実施により運営改善に努めております。

また、昭和五十七年度、第一八期生総数一七名の入学式を四月五日に行い、財団法人に衣替して以来第一期生の一五名に次ぐ少人数であります。今後、学生・職員が一体となり当大学の発展のため頑張ることを考えてあります。

卒業生の皆さん お元気で、ご活躍のことでしょう。

五十六年度も、昨年度と同様、十月十五日から降り始め、降雪量も同じ位でしたが、全体的に緩かく、積雪は少なかったようです。しかし、融雪後の気温が上がらず、草の生育状態は、遅かったようです。

さて、第一牧場の現況ですが、職員は、五十六年度は移動がなかったのですが、五十七年四月の移動では、黒瀬先生が転勤され、教務課から赤田先生が配置されました。

一、乳牛飼養頭数

昭和六十七年四月一日現在、第一牧場で飼養しています乳牛は、表一で示しているように、ホルスタイン種成牛三五頭、育成牛二二頭、肥育素牛六六頭（ホルスタイン種五四頭、ジャージー種一二頭）を飼養しています。

# ▲ 牧場の現況 ▼

## 第一牧場だより

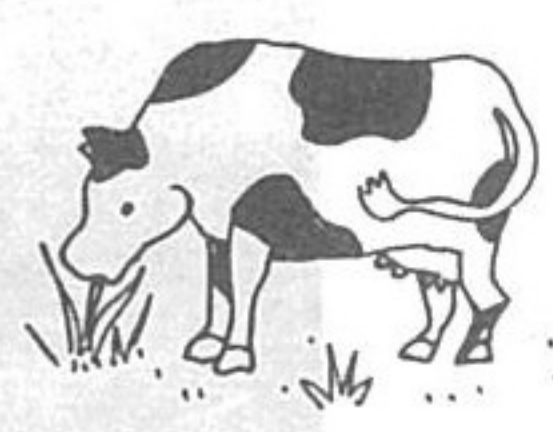


表 1. 乳牛飼養状況

(57. 4. 1現在)

区分	成 牛				育 成 牛				合計
	搾乳牛	乾乳牛	未経産牛	小計	12-18カ月令	12カ月令未満	令満	小計	
雌	30	5	5	40	10	11	21	61	
雄					J2 H1	J10 H53		66	
計	30	5	5	40	13	74	66	127	

年令別では、表2に示しておりますが、昭和五十一年以降生まれの五才未満の牛が七割を占めています。産次別では、表3に示すような状況で、平均三・二産で、三産以下が

表 3. ホルスタイン種の産次別構成

産次	1	2	3	4	5	6	7	計
頭数	7	8	4	6	4	2	4	35
比率	20.0	22.9	11.4	17.1	11.4	5.7	11.4	100

表 2. ホルスタイン種（雌）の年令別構成

出生年次	45	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	計
頭数	1	1	3	2	4	5	6	6	7	10	12	4	61
比率	1.6	1.6	4.9	3.3	6.6	8.2	9.8	9.8	11.5	16.4	19.7	6.6	100

表4. 月別生産生乳状況

区 分	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	
総乳量	55年度	15,203	15,949	13,710	13,846	14,360	13,436	11,823	12,318	12,353	11,545	11,591	16,516	163,225
	56年度	15,453	17,694	16,088	15,292	14,019	13,541	14,133	14,803	14,300	11,117	9,989	14,889	168,295
	前年比	102	111	117	110	98	101	120	120	116	96	86	90	103
一日一頭当り	55年度	15.7	18.4	15.5	14.5	14.8	14.5	14.6	15.2	15.3	14.9	15.6	17.8	15.6
	56年度	17.8	19.4	18.0	17.6	15.3	16.0	15.6	16.6	16.8	15.1	14.6	16.6	16.6
	前年比	113	105	116	121	103	110	107	119	110	101	94	93	107

五四・三多となっています。昨年度は九月十一日までに播種し終り、十月十五日か  
なっています。今年度も、肢脚、そ  
の他の故障で六頭を淘汰しています。

二、生乳生産状況  
五月中旬に、イタリアンライグラ

月別の生乳生産状況は、表4に示  
すように前年度対比でみると一二月  
までは、期待通りの乳量を得ること  
ができましたが、一月以降は、いろ  
んな事情が重なり減少し、一日一頭  
当りの乳量も落ち込みました。

三、自給飼料の生産状況

五十五年度の冬は、近年にない大  
雪で、そのおおりで、牧草の生育が  
悪く、放牧は五月初旬、青刈給与は  
五月中旬から給与し、平年より遅く  
なりました。

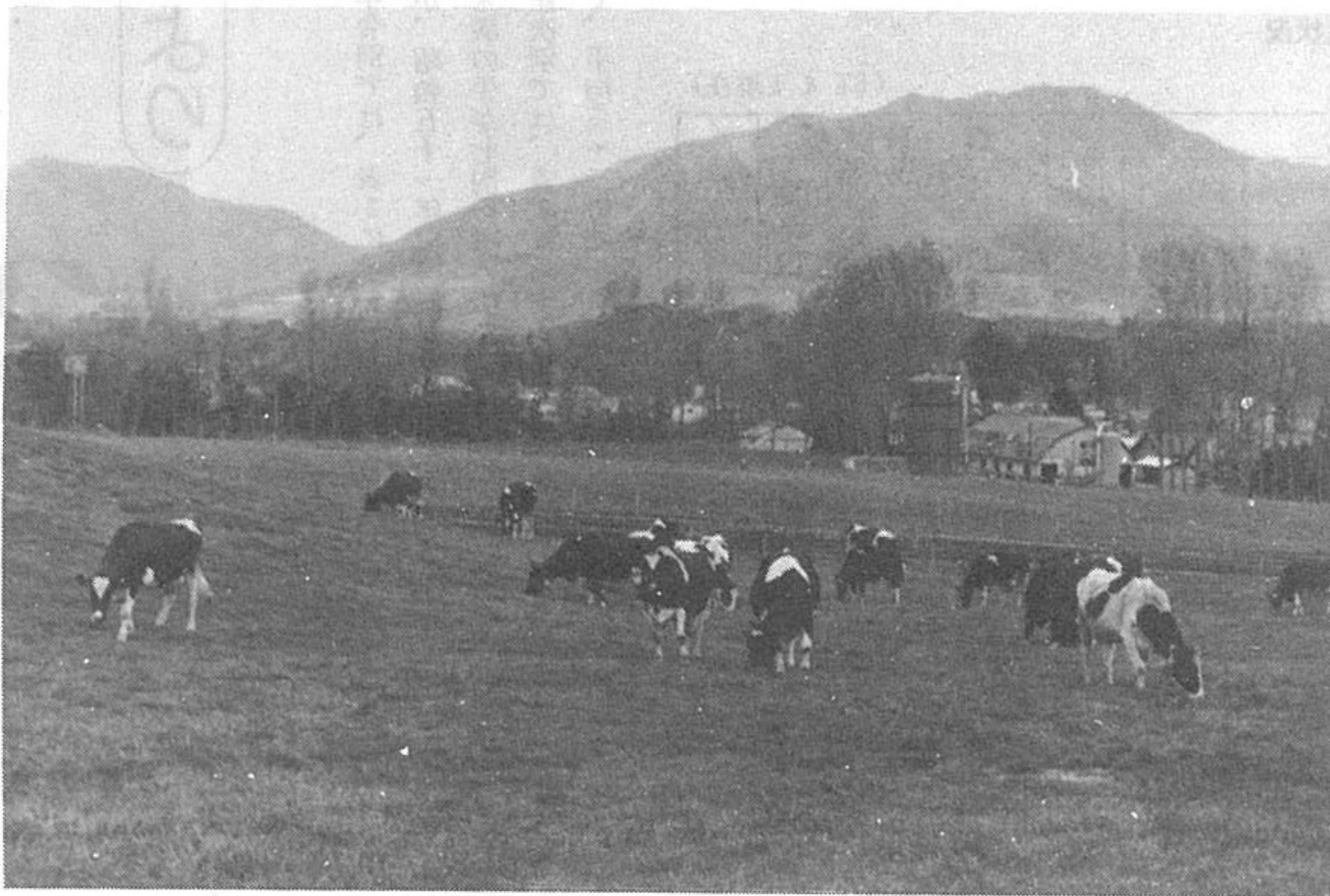
一、放牧利用について

放牧専用地六・七haを平年どおり  
利用し、輪換放牧をしています。放  
牧は、五月四日から十月十一日まで、  
実日数一二〇日、一日平均四〇頭、  
約三・一時間実施しています。本年  
度は、牛と草地のことを考えて七月  
二十三日から九月四日までの暑い時  
期に夜間放牧を実施しています。

二、青刈利用について

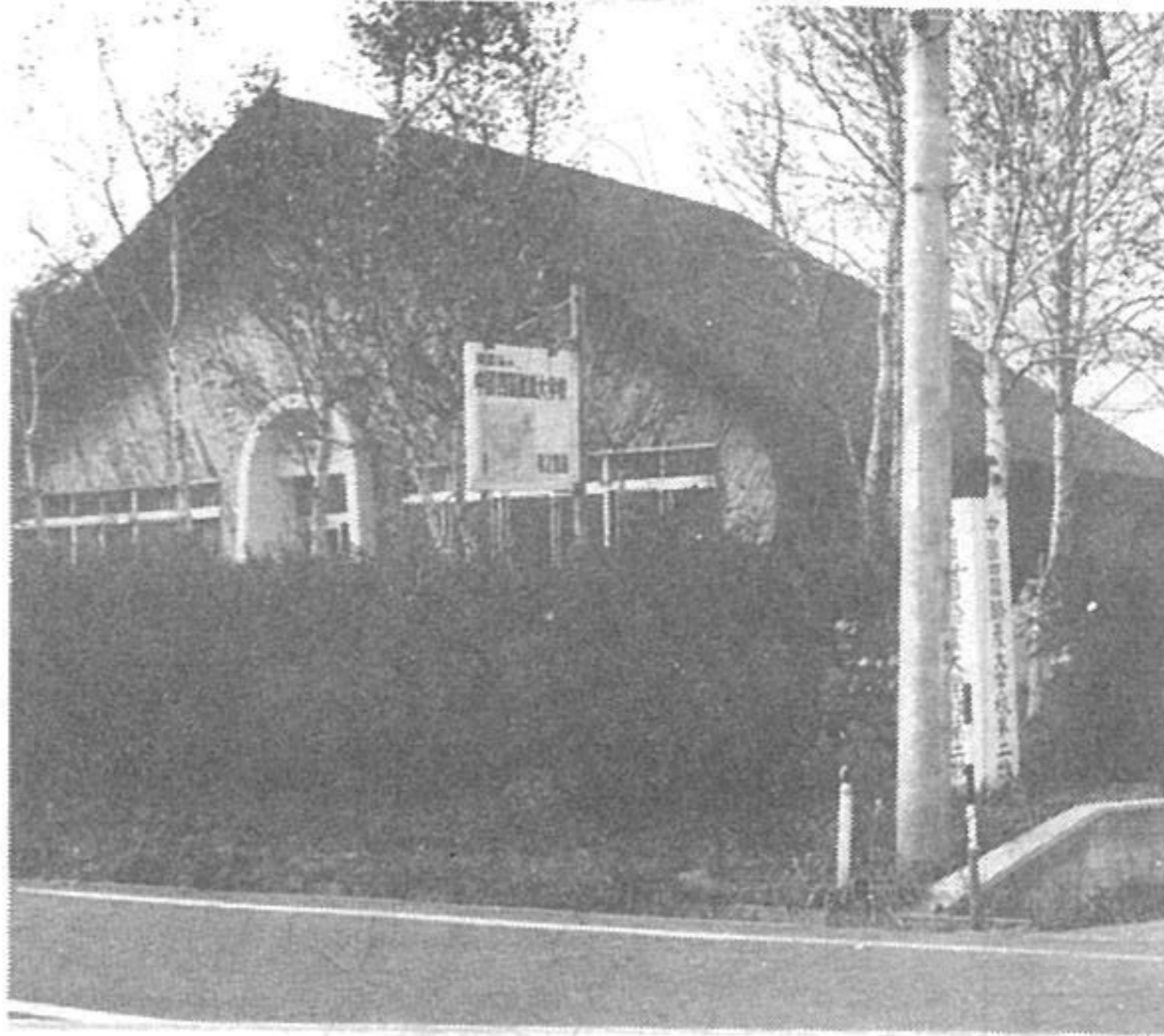
青刈は、五月十三日より給与し始  
め、オーチャード混播牧草、ルーサ  
ン混播牧草は、三番刈りまで利用し

以上第一牧場の近況についてお知  
らせましたが、今後も牧場の発展  
と充実に努力して行くつもりです。  
最後に卒業生のご健勝となお一層  
のご活躍をお祈りいたします。



第一牧場の放牧

# 第二牧場だより



第 2 牧 場 事 務 所

卒業生の皆さんお元気ですか。第二牧場周辺の草地も、次第に青々と茂り始め、牧柵やトウモロコシにと心急がしい毎日です。

さて、第二牧場の現況ですが、先ず、職員についてお知らせします。

一、職員は、この四月の移動で場長（小福田）、主任（本庄）、技師（多田）と転勤され、後任として、伊藤、若田、西谷の三人が先輩諸氏が次第に少なくなって来ております。

昭和五七年四月一日現在の飼養状況は表一のとおりですが、年々淘汰更新され、皆さんの思い出に残る牛が次第に少なくなって来ております。

表 1. ジャージ種種の飼養状況

区 分	成 牛				育 成 牛				合 計
	搾乳牛	乾乳牛	未経産牛	小 計	12月～18令	6月～12令	12ヶ月未満	小 計	
雌	87	14	16	117	5	10	18	33	150
雄					⊕ 28		⊙ 7	35	35
計	87	14	16	117	33	10	25	68	185

表 2. ジャージ種（成牛）の年令別構成

出生年次	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	合計
頭 数	1	0	1	4	5	9	8	10	13	20	13	16	17	117
比 率	0.9	0	0.9	3.4	4.3	7.7	6.8	8.5	11.1	17.1	11.1	13.7	14.5	100

表 3. 月別生乳生産状況

区 分		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合 計
		総乳量	55年度	24,569	29,816	27,482	26,706	28,990	29,422	24,980	23,982	23,654	23,165	
	56年度	21,626	29,624	29,609	25,080	24,799	24,578	24,928	23,834	19,888	21,343	19,074	22,194	286,577
	前年比	88	99	108	94	86	84	100	99	84	92	110	117	
一平均頭当り量	55年度	9.9	11.2	11.3	10.6	10.8	10.8	10.1	9.7	9.5	9.3	8.2	7.8	
	56年度	8.9	10.7	11.2	9.7	9.9	10.2	9.9	10.3	8.1	8.8	8.9	9.3	
	前年比	90	96	99	92	92	94	98	106	85	95	109	119	

しかし高能力牛の子供達が次々に保留され、次の時代を築くべく待期しておりますので御安心下さい。

三、牛乳の生産状況  
五六年度は、サイレージ用のトウ

モロコシが除草剤等の点で不作だった事と、五五年度の異常気象の後遺症等で期待通りの粗飼料給与が行なえず、これが生乳生産にも大きな影

響を及ぼした様です。月別の生乳生産量は表2のとおりです。

## 四、自給飼料の生産状況

第二牧場の草地は図1のように一牧区から十七牧区に区分され、総面積六四、六ヘクタールであり、これらを従来通り、放牧、乾草、サイレージ等に利用しております。四月現在、皆さん方も思い出のある牧柵張りや、堆肥運搬、トウモロコシの播種準備等、急がしい毎日です。

## 五、肥育の現況

牛肉需要の増大に対処し、安価な牛肉を安定的に確保すると共に、畜産複合経営の教育と、高令地における肉用牛肥育の実証を行なうため、国の助成を受けて、昭和五四年度から始まった、低コスト肥育牛生産促進事業も、今年三年目であり、第一牧場では旧三木ヶ原寮を改造した牛舎で肥育の仕上げを行っており、現在ホルスタイン二七頭を飼養しております。

以上、第二牧場の近況についてお知らせしましたが、今後更に牧場の発展と充実のため場員一同ますます頑張っていくつもりです。

最後に卒業生の皆さんの健康と益々のご活躍をお祈り致します。

表 4. 草地利用状況

牧 区	面 積ha	利 用 状 況		
		1 番 草	2 番 草	3 番 草
1	3.0	サイレージ	サイレージ	青刈
2	2.0	トウモロコシ	トウモロコシ	更新
3	2.7	サイレージ	サイレージ	青刈
4	1.1	乾草	放牧	放牧
5(1)	2.0	放牧	放牧	放牧
5(2)	2.0	放牧	放牧	放牧
6(1)	0.7	乾草	放牧	放牧
6(2)	5.0	サイレージ	乾草	放牧
6(3)	2.6	放牧	放牧	放牧
7(1)	3.0	サイレージ	放牧	放牧
7(2)	3.2	放牧	放牧	放牧
8(1)	2.8	放牧	放牧	放牧
8(2)	3.0	トウモロコシ	トウモロコシ	更新
9(1)	3.0	放牧	放牧	放牧
9(2)	1.0	放牧	放牧	放牧
9(3)	3.3	トウモロコシ	トウモロコシ	更新
11	0.3	放牧	放牧	放牧
12(1)	2.0	放牧	放牧	放牧
12(2)	2.5	放牧	放牧	放牧
13	4.2	乾草	乾草	放牧
14(1)	3.0	放牧	放牧	放牧
14(2)	1.0	放牧	放牧	放牧
15	2.0	サイレージ	放牧	放牧
16(1)	2.0	放牧	放牧	放牧
16(2)	2.5	サイレージ	放牧	放牧
17	4.7	サイレージ	乾草	放牧
計	64.6			

図 1. 第二牧場草地略図

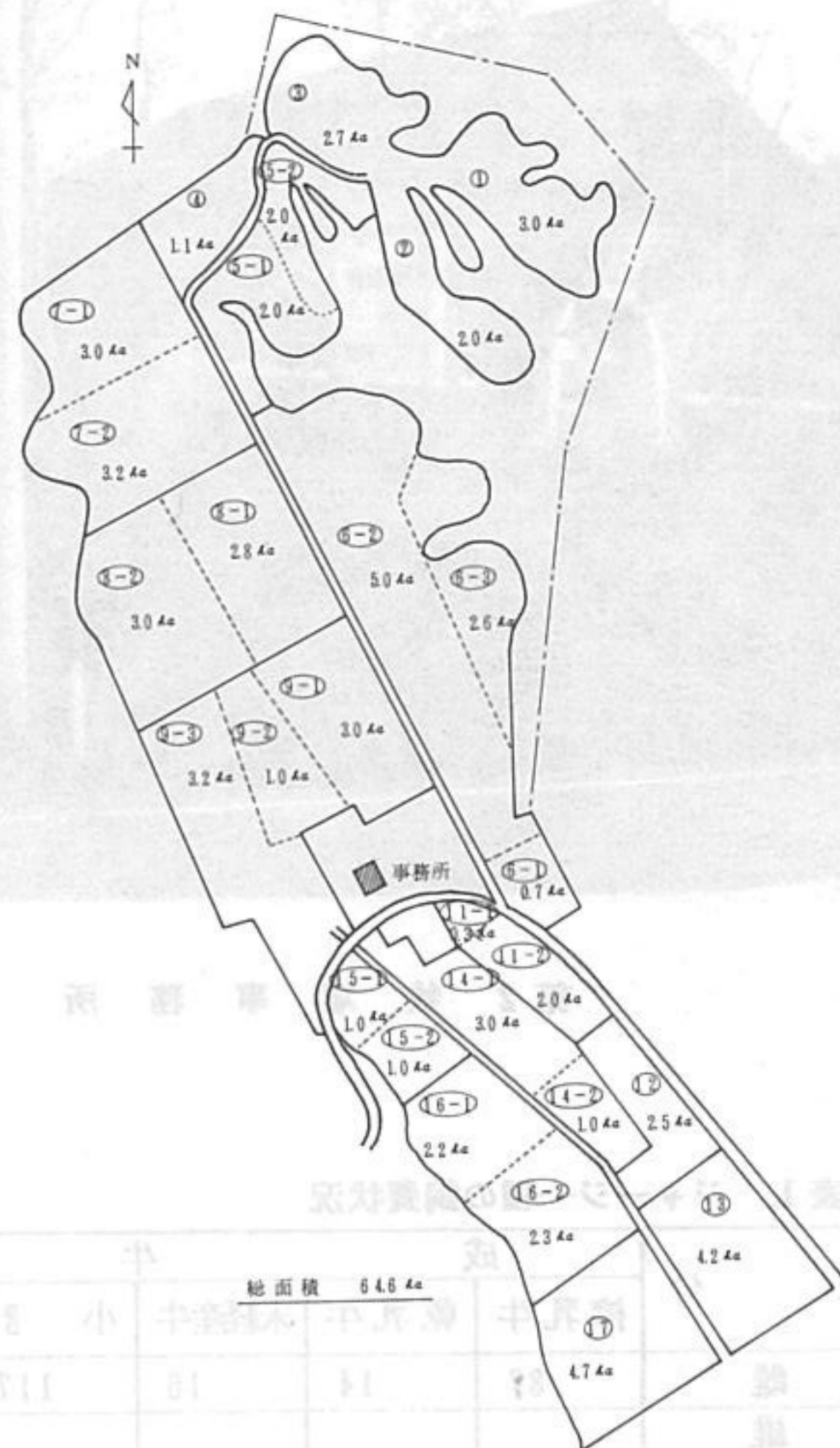


表 5. 肥育牛の飼養状況

区分	月令	12	13	14	15	16	計
ホルスタイン種		12	9	1	3	3	28

卒業生からの便り

ニュージーランド

海外研修報告

第十五期卒業生 吉田 憲 司  
(島根県安木市赤江町)

一、ニュージーランドの酪農

ニュージーランドは大規模な工業も、ほとんどない農牧国である。貿易は、酪農製品が全体の六五パーセントを占めている。国土面積は、二六八五ヘクタール(日本の三分の二)で、北海道を除いた日本全土の大きさに当たる。イギリスの移民が大半で、うちマリオ族(ハワイ諸島から)が幾らか入っている。ニュージーランドを世界で屈指の集約草地農業に発展させてきた条件としては、いくつかの気候的特徴が挙げられるが、適当な降雨量と十分な日照、そして四季を通して気温が二一℃(一月盛夏)から四・四℃(七月厳冬)と温暖であり、特に冬も牛や羊が野外に居られるくらい温和で、かつ北島では、一年中牧草が生長を続ける等のためである。又、ニュージーランドの酪農は、濃厚飼料を全然用いない。

ただし、冬季は牧草が少し不足するので、最盛期の夏季に乾草やサイレージにして、冬季に備えている。又、八月の一ヶ月間に集中分娩を行う。このため乾乳及び牛の性周期も、全頭が一ヶ月以内にほぼそろろう。(一頭当たりの搾乳期間は、九ヶ月である)この国の乳牛の七四パーセントまでが、ジャージー種である。私のファームでは、ジャージー種ではなく、すべてフリージャン種でしたが、これは、乳固型分が余り変わらないのに乳量では、フリージャン種の方がずっと多かつたためです。又、牧草地が山頂まで続いていると、足腰の弱いジャージー種では、問題が多いからです。搾乳は、すべて機械で行なわれ、主としてヘリボン式、近年になってロータリー方式がとり入れられている。

## 二、酪農にたずさわって

### 感じたこと

とにかく頭数が多い。一ファーム当たり、二百頭平均。土地にして、七、八十ヘクタール位になる。私のライスファームでさえ、一ヘクタールのというのに、この広さは、日本人の農業感覚をはるかに越えている。又、グリーンのカーペットと言われる、この草地は、実に美しい。この中に、羊の群れ、牛の群れを見るたびに感動をする。こう言ったところが、本来の酪農の姿だとさえ感じて、日本に帰って、牛舎飼いの、スタンションにつながれた、配合飼料に頼



ファームの子供とのひととき

った経営にひどく反発しなくなった。日本の酪農の場合、よく共進会に力を入れて体型重視させますが、これは、乳量と体型とは反比例してしまい、余りよい事には思われません。私は、以前に広い土地に放牧主体の酪農経営が理想としたのですが、なかなか日本には、十分な土地がないようです。又、気温の面でも、いくつかの問題点があります。ニュージーランドでは、毎年夏場三〇℃を越えることがなく、冬場も六〜一〇℃の平均気温を保つという気温に恵まれている面がありますが、日本の場合、冬場に草の収量を上げることが

出来ない。とても、この時季に放牧など出来ない。又、夏場にしろ、そう言えよう。牛の寿命にしても、ニュージーランドの場合、平均八年。日本の場合は、平均四年位でしょうか。やはり、放牧主体と舎飼い主体の差でしょう。牛は、十分な運動と緑の草が必要なのです。こう言ったことを日本を離れて、ひどく感じました。

## 三、ニュージーランドのすばらしさ

ニュージーランドは、以前イギリスの植民地で、このほど二百年祭があったばかりの若い国です。自然条件に恵まれていることから、農牧業を産業の中心として発展させてきました。南島の最高の山は、マウントクック（三、七六四メートル）で、富士山とほぼ同じである。又、ニュージーランドは、ビールをガブ飲みし、ワインを楽しむという風に、大の酒好きである。週末のバブでは、どこでも客でいっぱいになるようです。この国の料理は、やはり、ステーキ（牛肉）、ラムチョップでしょう。豚肉よりも牛肉の方が安いのは、やはり、この国の特徴と言えます。又、この国で最もイギリス風美しい街として名高い、クライスト



一直線な農道

（酪農大学卒業後一年間  
ニュージーランドで研修）



# 大学校日誌から.....

○四月六日 希望に胸をふくらませ、第一七期生三四名が酪農を志して入学した。

○四月一〇日 学生及び職員相互の新睦を図るため、校内研修が交替するたびに開催している校内球技大会を開催。

○五月一四日 実験圃場にトウモロコシを播種し生育調査を続けた。

○七月九日 農業土木実習を真庭職業訓練校で行った。

○七月～八月 学生募集のため中国四国各県及び兵庫県の関係機関、高等学校を巡回訪問した。

○七月二一日～二二日 乳牛動態調査を実施して二日間牛の行動を熱心に観察した。



乳牛動態調査

○三月二六日 第一六期生一八名が工授精講習会が開催され連日熱心に講習を受けた。

○一月二八日～二月一六日 家畜人工授精講習会が開催され連日熱心に講習を受けた。

習得して登校した。



家畜審査実習

○一〇月二日 第十六期生後期始業式挙行。一六期生が校外実務研修をおえ、各研修地で知識と技術

○八月二六日 トウモロコシ、サイ

レージ詰込み作業開始、職員と学生が汗を流して詰込んだため高品質のサイレージが出来た。

○九月二一日 牧場の乳牛を囲み、乳牛の審査実習を行った。

多数の来賓の祝福を受け、酪農経営士の称号を授与され卒業した。



トラクター運転

## 人の動き

○退職者  
昭和五七年度、岡山県定期人事異動が四月一日に発令され、次のとおり諸先生の移動がありました。

校長 宮本 宣明  
副校長 服部 剛

### ○転出者

総務部長 河野 俊治  
岡山県真庭環境保健所 総務主幹  
課長 有富 敬典  
岡山県真庭地方振興局 農林事業部畜産係主任

### ○現職員名簿

(昭和五七年四月一日現在)

第二牧場 校長	小福田 満郎	第二牧場 場長	伊藤 述史
第二牧場 主任	岡山県津山環境保健所 主任	技師	若田 茂
第一牧場 主任	本庄 四郎	技師	西谷 公志
第一牧場 技師	岡山県営食肉地方御売 市場主任	助手	高橋 俊彦
第二牧場 技師	黒瀬 浩平	助手	磯田 博
第二牧場 技師	岡山県真庭家畜保健衛生所 技師	助手	三牧 孝徳
第二牧場 技師	多田 幸四郎		
第二牧場 技師	岡山県井笠家畜保健衛生所 技師		

部長	西谷 勝男	部長	大石 俊之
主任	池田 勝	主任	津田 清子
主任	前田 英弥	主任	戸田 道子
主任	池田 富幸	主任	樋口 知子
主任	津田 清子		
主任	池田 富幸		
主任	戸田 道子		
主任	樋口 知子		
技師	赤田 高則		
技師	上原 逸史		
技師	樋口 昭夫		

## 編集後記

○卒業生の皆さん、お元気で活躍のことと思います。今回の学園便りは学校の近況、第一牧場、第二牧場の現況及び人の動きを中心にお知らせしました。今後、学園と卒業生の皆さんとの連けいを深めるため、皆さんのご便り、ご寄稿を期待します。

